

県医活動報告

第14回男女共同参画フォーラム

日 時：平成30年5月26日(土) 13時～17時15分

場 所：ザクラウンパレス新阪急高知

報告者：常任理事 貞永 明美

第14回男女共同参画フォーラム（日医主催，高知県医師会担当）が5月26日(土)に「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして ～超高齢化社会で若者に期待する～」をメインテーマに高知市内で開催された。冒頭，横倉日医会長より「若い世代が減少する中で，女性であることでキャリアを断念するということがないような環境を作り，女性が働き続けて共に未来の医療を支えていくことが重要である」との開会挨拶の後，岡林高知県医師会長より歓迎の挨拶が行われた。

メインテーマ

「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして

～超高齢化社会で若者に期待する～」

【基調講演】

「次世代につながる生命科学とは」

京都大学大学院理学研究科 生物科学専攻動物学教室

教授 高橋 淑子

昨今の「出口を見据えた研究優先」という科学技術政策に，生命科学者は危機感を持っている。「今」に対する危機感でなく，むしろ次世代の我が国の科学力低下に対する危機感です。次世代の科学を牽引する若者を惹きつけるサイエンスとは何かについて一緒に考えてみたい。

私のオフィスの壁には，Viktor Hamburger先生の言葉「我々の真の先生は，embryoであり，いつも正しい唯一の先生である」をかかげていて，悩んだらこの言葉に戻るようになっている。

生命科学が真の意味で社会に貢献する姿を考えてみたい。

体節の形成は，ヒトの発生にとって重要であり，分節がおこる位置には「切る」活性があり，はさみとしてエフリンが活性化され，体節が次々切られていく。その後の分節の研究より神経幹細胞の理解が進む。「はみ出し者」が重要で，ハンセン病ではこの「はみ出し者」の不良化したものとわかり，また「尻尾」に秘められた生命の本質もわかってきた。胴体の一部でもなく，延長でもない。

Primaryneurotationに対するsecondaryneurotation，(SN細胞)で，ヒトはしっぽはないが「しっぽの素(SN)」はまだ残っているのは何故だろう。

次世代につながる生命科学とは，創造性豊かな研究こそが次世代を支える。知的活動を伴う強いCuriosityの醸成が必要で，質の高い研究をとおした大学院生の教育をと結ばれた。サイエンスを目指す若い世代にも，直接響く講演であった。

「報 告」

1. 日本医師会男女共同参画委員会

日本医師会男女共同参画委員会委員長 小笠原 真澄

平成28・29年の日医男女共同参画委員会の活動報告

- ① 会長諮問「医師会組織強化と女性医師」に対し、答申の作成，提出
- ② 男女共同参画フォーラムに対する意見具申
- ③ 「ドクターゼ」，（医師の働き方を考える）コーナーの企画立案
- ④ 女性医師支援センター事業への協力
- ⑤ 都道府県医師会における女性医師に関わる問題への取り組み状況調査
- ⑥ 女性医師の勤務環境の現況に関する調査（女性医師支援センター共同）
- ⑦ 女性医師の勤務環境の現況に関する調査 比較詳細版の作成

2. 日本医師会女性医師支援センター事業

日本医師会常任理事 今村 定臣

- ・平成18年より厚労省の委託事業として女性医師の就労支援
- ・平成29年の女性医師バンクの就労支援実績を報告
- ・医学生，研修医サポートの開催。
- ・女性医師支援センター事業ブロック会議
- ・医師会主催講演会での託児サービス併設促進と補助
- ・男女共同参画委員会とともに，「女性医師就業に関わる実情調査」の分析並びに前回調査（2008年）との比較
- ・平成30年は病院長，病院開設者・管理者への講習会を再開予定

「シンポジウム」

- | | |
|----------|--|
| コメンテーター | 日本医師会常任理事 今村定臣 |
| コーディネーター | 高知県医師会常任理事 中澤宏之
高知大学医学部長 菅沼 成文 |
| シンポジスト | 一般社団法人高知医療再生機構 理事長 倉本 秋
若手医師 児玉佳奈・岡村徹哉
オレゴン健康科学大学 家庭医療科助教授 大西恵理子
高知県医師会常任理事 計田 香子 |

1. 「偶然と集いの医療環境マネジメント；高知の試み」

一般社団法人高知医療再生機構 理事長 倉本 秋

「医師不足」を含め，医療の課題を一つの自治体，病院で解決するのは本来不可能ではあるが，高知県では40歳以下の医師数の減少が大きく，危機感を持ち平成21年度に国の補正予算の地域再生臨時特例交付金，50億円を出資金として機構を立ち上げ，スピードアップし，「地域医療再生基金」とし，その年度ごとの一般財源も確保しつつ「若手医師のキャリア形成支援，生涯学習支援」に取り組んだ。既存の奨学金制度の他，短期・長期留学の支援，論文作成への支援，学会出席支援，専門医・指導医の育成などに取り組み，結果「高知にいるからこそ生涯学習や

キャリア形成ができる」ことにより、平成21年に研修医マッチングは40名と最少だったが、機構発足後の28年は62名と1.5倍になった。

40才未満の医師数も28年に前年度に比べ35名増加した。また「高知家プログラム」として県内の医療機関全体で総合診療医を育成する試みも30年度から開始される。男女共同参画に対する取り組みの推進など、幅広い活動を紹介された。

2. 「若手医師が考える少子高齢時代のキャリア形成」

若手医師 児玉 佳奈 高知県安芸福祉保健所

岡村 徹哉 高知医療センター初期臨床研修医

児玉氏より高知県は少子高齢化が全国に比し先行している。このような地域で医学教育を受け、医師としての第一歩を踏み出した事もあり、少子高齢化社会の医療の役割を自然に感じキャリアプランをたてた。また高知県は初期研修制度で、県内8つの病院を中心に全体で若手医師を育成（協力型研修制度）。県内研修医が皆同期で、情報交換も盛んであり、協力体制にあると報告。

岡村氏は研修医で組織する「コーチレジ」の活動より、若手医師が自ら必要とするものをアップする研修環境を紹介し考察。自身も他県より「楽しそう」と思い、県外から研修にきている。若手医師を取り巻く医療環境は大きく動き出している事。「新専門医制度」の設立は多くの研修医が専門医としての役割や医師としての生き方を再考するきっかけとなった事等を報告。

3. 「女性医師の現状、米国オレゴン健康科学大学 家庭医療科の現場から」

オレゴン健康科学大学 家庭医療科 助教授 大西 真理子

大学に見学に来る日本の女子学生より、研修医に妊婦が多い事の理由を質問され、現状と理由を推察した。

家庭医療科を目指す学生は他の学位をとっていたり、他の職業についていたり、海外での支援活動、留学等様々な経験を持った学生が多い。年齢の問題で研修中に妊娠する女性研修医が約半数いる。多くは3ヶ月の産休を取っている。男性も妻の出産に合わせて休みを1ヶ月取る事が多い。休暇、欠席については、短期はjeopardyシステム、長期は追加研修ややり直しの検討が決まっている事を報告。

4. 「高知県医師会・高知県女医会の活動について」

高知県医師会常任理事 計田 香子

高知県医師会は会員数1,337名中、女性219名(19.9%)、医師会役員は27名で女性は2名(7.4%)である。男女共同参画委員会は平成22年発足。高知大学医学生への男女共同参画や地域医療をテーマにした講演、新研修医へのオリエンテーションで医師会活動や医師賠償責任保険、女性医師支援等の説明および保険診療についての講義を行う。婚活活動も行っている。

高知県女医会は昭和15年に25名で発足。医師会会員でなくても入会できる。現在114名の会員、会員相互の親睦、医道の向上を図ることが目的で、講演会、昼食会、総会、新年会、機関誌発行などの活動について報告。